

Alma Mater SAPIENTIA



英知大学同窓会会報

Vol. **7** Mar.10.1997

発行：英知大学同窓会 兵庫県尼崎市若王寺2-18-1

発行責任者：野村裕

編集：英知大学同窓会総務委員会

- 新正会員をお迎えして……1
- 学園だより……2
- 土曜講座のお知らせ……3
- ホームカミングディ……4
- 卒業生からの手紙……5
- 関東支部だより……6
- クラブ紹介……7
- BOOK REVIEW……7
- 同窓会と大学の関係を有機的なものに……8

新正会員をお迎えして

会長 野村裕

卒業生の皆様、ご卒業を心よりお喜び申し上げます。ともに、同窓会への正会員としての入会を、力強く思い、こころより歓迎の意を表わしたいと思います。

我々の学生時代と比べると大学もますます大きくなり、学生数も、数段の違いがあるのには驚いています。しかし、学生数人に話を聞くと、クラス単位はあるものの、クラス全員の顔を知っているわけではなく、我々の学生時代の様に、一回生～四回生のほとんどの人と顔を知っていた経験をもつ者にとつては、何か信じられない思いであります。何か、さびしさと残念さを思いながらも、集団の人の触れ合いの無さや時代のすう勢、人数が増えると、そういうものかなアーという思いです。

学生時代は、ほとんど規制のない時間、考え方、行動、人間関係、等々、手にする自由は、無限大にあつたように思います。先輩から、社会は厳しいとよく言われていましたが、自分で、その厳しさの経験をしてみないとなかなかわからないものです。



今は、学歴社会から実力社会への転換期と、よく言われますが、現実には、まだまだ、大学名や学閥といった偏見が、実際にはあります。我々の大学のように、まだまだ卒業生が少なく、世に言う有名大学でない場合、現実社会においても、その部分においては、マイナスの面を経験するかも知れません。しかし、これからの社会は、規制緩和を

はじめ、上場会社が倒産するような時代で、過去の尺度では、計りきれないことが、現実には、多々起こってきております。その時々、各個人が「どうするか」という観点で物事を判断し考えていかなければなりません。それは、学生時代と比べて、より以上に「主体的自主的責任」を持った発言、行動、考え方を要求され、指摘されていくものと思います。

まだまだ、他大学に比べると助けてくれる卒業生が少なく、今日からは、一人ひとりが一匹狼的に社会で力強く生きていかなければならなくなります。ある種の冒険心、チャレンジ精神を持ち、頭が柔軟で、古い知識に染まっていけない若い力が、今必要であると思います。ここで、持ち続けてほしいパワーは、自ら主体的に考え、そして、行動していくことです。

そうすることが、我々同窓生が側面的に大学を支えているということに結びつくと思います。すなわち、同窓会会員は、卒業して始めて母校の看板を背負うのです。「英知大学」が社会において高く評価されるか否かは、ひとえに、私達同窓生の努力にかかっているということです。それには、まず、みずからが大学に誇りを持つことです。卒業生の皆様はこれから、広く各領域で活躍されることでしょう。その活躍を通じて母校の素晴らしさをもっと多くの人々にわかってもらえればと思います。

また、さびしくなり、つらくなくなり、たまたまなくなった時、明るく、楽しく迎えてもらえる所が、同窓会だと思えます。

ホッとできる安息の場の提供、組織作り、人の輪、充実した情報を提供できるよう、会員の皆様の協力のもと、役員一同、頑張っていきたいと思えます。



クラブ紹介

新文学研究会

さて、今回は同窓生の方々へというのですが、私たちの部はまだ10年と歴史がありません。だから、あまり広くは知られていない。よって、基本的なことから紹介することにします。

大学生ともなれば、部員それぞれに自分のしたい事やしなければならぬ事(例えば大学の勉強や、アルバイト)があるでしょう。そのために日々の活動は、部員を縛ることはなく悠々自適、かつ計画性のあるという相反するものを両立し、使い分けることのできる部をめざしています。

部員総数20人。月に一度の会誌『やみなべ』、季節ごとに『文学無法地帯』、文化祭には『翫天』と『ぬえ』を制作することです。文学研究会というたいそうな名前ですが、要は文章を書くことが好き

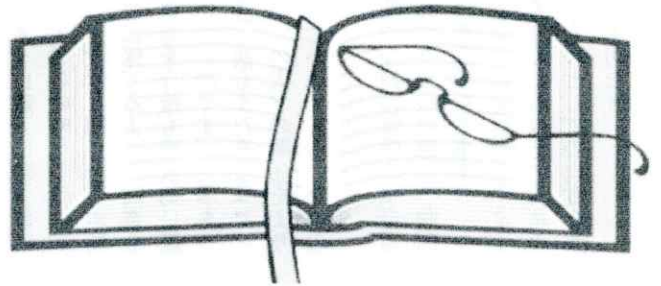


学園祭前「翫天」編集中

な人間の集まりです。(その筈です)書くことがメインと言われればそうなのですが、それだけではありません。前文で説明した発行人物を、すべて手作業で制作しているのです。何かと費用がかさみ、いろいろと不備が出ることも多々ありました。それでも現在まで…浅い歴史ですが、続いているということは、諸先輩方の努力の賜物でありましょう。

現在、部としての関心事であり、現役部員の私としても最も頭を悩ませ、それと共に期待も大きいのが新入部員の勧誘です。すでに1月の終わりから分担作業を始めており、気合いも十分。私が入部したときは二回生がおらず、私たち一回生も、三回生、四回生の先輩方も苦労しました。私たちが、そのようになさなくてもいい苦労をしないように、そして何よりも、再来年の(入ってきてくれると仮定して)新入生が苦労しないように、

BOOK REVIEW



ヌサンタラ・インドネシア

英文科3回生 平田愛

三浦太郎氏が執筆されたこの本は、海外を一度も旅行したことのない私にとっては、難しく遠いものだった。読んでいくうちに「へえー。こんな場所にこんなものがあるのか」と知らないことが次々とページをめくる度に出てきたが、真に迫るものをどうしても感じる事ができず、なんだか腑に落ちなかった。あまりにも自分のアジアに関する知識のなさとして遠い存在の出来事のように、ただ客観的に読むことしかできなかったのだ。

本の中に飛び込んで、作者と作者の家族と同じ旅行を楽しみたかったが、楽しむどころか、圧倒されていた。はずかしながら、マレーシア、シンガポール付近にこんなに沢山の島々があることも知らなかった次第である。

しかし、作者が織りなす話の展開は、私のアジアに対する価値観を少しずつ変えさせていった。私は以前からアジア、東南アジアにたいして偏見を持っていた。もし、旅行をするなら、絶対にヨーロッパかアメリカか決めていた。アジアを旅行するなどということとは全く選択肢に入っていなかった。先入観からくる偏見の気持ちでいっぱいだったのだ。

だから「アジアに興味を持ってます」とか「今インドのどこそこにいる」と言っている私と同じくらい年齢の女性をテレビで見ると、私はどうしても理解できず、首を傾げて、疑っ

ていた。

しかし、この本と出会ってその謎が少しずつ解けていった。著者が本の中で、彼が訪れた国のことを大切に想い、優しく包みまた、伸び伸びとした気持ちで書かれてあるのを強く感じた。著者が感じた気持ちが文字として私の目に入ったとき、それは文字ではなく、彼が話している言葉のような錯覚にとらわれた。私がこの本と出会ってよかったと思うのは、私のアジアに対しての価値観が少し変わり、今までのアジアに対しての偏見の気持ちが揺らぎ始めていくこともあるが、それ以上に著者が訪れた国々を大切に想い、大事に見守る暖かい心を持っていることを知ることができたことだ。私はそんなふう

に今まで考えたこともなかった。その訪れた国の歴史、文化そういうものを全部ひっくるめて、優しく包み込む。そんな人間っぽい心がどれだけ貴重、言葉の汚れもなく、ただ純粋で一番簡単なで、一番難しいその気持ちを私は知らなかったような気がする。

本の中の世界を著者と著者の家族と一緒に過ごさせていたとき本を閉じたとき、本の中のいきいきとした文字達が、私に何か話しかけようとしていた。それは、偏見を持つとか、アジアですてきたよといった意味あいの言葉ではなく、ただの沈黙の中にひっそりと考える時間を与えてくれる音のない言葉だった。著者が抑圧的にアジアの魅力や語らないことが、私の胸を打った。心からうれしく思った。この本に出会う機会を与えて下さった三浦太郎氏に感謝したい。

同窓会と大学の関係を

有機的なものにし

大学冬の時代を乗り切りたい

国際言語教育センター所長

井田規文

先頃、私ども英知大学国際言語教育センターは、同窓会事務局の藤本氏より朗報を受けました。かねてお願いしておりました留学する在生のため奨学金の額を本学が支給する留学奨学金と同額の50万円まで同窓会予算に計上できるといふ知らせです。まずは、ご配慮いただいた同窓会会長はじめ、役員の皆様には、留学をめざす学生たちになりかわり、厚く感謝申しあげます。

私どもの感謝には二つの意味での感謝と、一つの希望が含まれております。この留学奨学金を従来10万円から5倍の50万円をお願いして、その希望を叶えてくださったことに対する感謝であることは申すまでもないことです。同窓会が卒業生のみならず在生のために支援体制を整えてくださることに、同窓会の「英知大学をこよ

として献金を当センターの前身、旧国際交流委員会に寄せられ、正

なく思う心」が伝わってきます。大学に勤める者としては、在生と共に大いに感謝しなくてはなりません。

もう一つの感謝の気持ちは、こちらの方をもっと声を大にして言いたいのですが、同窓会の会としての意欲・意気込みの強さへの感謝です。

実は、今年97年度より、留学奨学金の増額をお願いするに際し、私どもには多少の躊躇がありました。景気回復が遅々として進まず低迷が続く日本経済にあつて、同窓会もその影響は拭い取れないのではないかと。実際にご無理願えたとしても同窓会運営に経済的支障を来させはしまいかと、心苦しくも感じたことでした。正直に申し上げますと、今もその心苦しさを抱いております。バブル期には企業からも奨学金

として献金を当センターの前身、旧国際交流委員会に寄せられ、正にバブル期・円高の波に乗って留学した学生が今よりは多かつたのは事実であります。勉学への動機は純・不純はあえて問わないとして、ただバブルが弾けて奨学金が減つても、実際に留学を目指す学生は存在する。そのことを同窓会がしっかりと受けとめて、大学と同額の支援体制をとってくださることに感謝せざるを得ません。たとえこの体制が半永久的ではなくても、今回、このような奨学金増額を決定して下さった同窓会の意欲・意気込みを意欲止め、留学者の学生がその意図を十分に汲んで勉学に励むように指導してゆく所存であります。

そこで最後に私どもの一つの希望であります。17歳人口減少傾向にあつての大学冬の時代を生き抜くためには、大学と同窓会との関係を有機的に保てるよう、同窓会としての努力を今後も意欲的に続けてもらいたいです。大学あつての同窓会、逆もまた真なりで、同窓会あつての大学の関係をより明らかにしていってほしいです。

その意味で今回の留学奨学金増額は、改めて今後の同窓会の動向を占うのに意義のある事業の一つであると、大学・同窓会のますますの発展を希う私どもはその責務の一端を担うものとしての自覚を改めて強めております。

THE EDITOR'S COMMENT

今回の会報より、編集方法、レイアウトを一新しました。

会員の方々から、読みにくい、記事が固い、もっと楽しめる内容を、とのお叱りを多く寄せて頂きました。編集作業を進める私としても、これらありがたい助言に前向きに取り組んでいく覚悟です。

レイアウトは読みやすさと、紙面の組みやすさを考えて縦書きとしました。縦書きにしたものの、数字の表記方法などまだまだ私自身の中で迷いがあります。漢数字は読み慣れている人が少ないとの判断で、基本的に使わない方向で今回の会報は編集しています。

また、総会の決議や予算案など、本来会報でお伝えすべき重要な内容をひとまとめにして別紙に印刷することにしました。これにより、会報は皆様に楽しんでいただく内容を中心とすることができ、反対に別紙は必要事項としてより一層目を通して頂けるのではないかと考えております。

前々までの会報で、英知大学同窓会会報の骨組みはできあがったように思います。これからはこの会報に肉付けをしていかねばならないと考えています。これまでの

会報も皆様のご鞭撻や協力がなければできあがりませんでした。これからの会報も皆様のさらなるご協力、ご尽力がなければ成功しないでしょう。なにしろ、これからは会報を大きく育てていかねばならないのですから。

引き続き、原稿を募集いたします。詩や随筆、クイズ、イラストなど同窓会に関係がないように思われるものでも大歓迎です。また、この会報の不備などをお叱りください。より読みやすく、楽しめる会報を目指していきます。

最後になりましたが、会報の編集作業、レイアウト、記事集めにご助力頂いた方々に深く感謝いたします。

会報を初めて手にされた新入生の皆様、ご入学おめでとうござい

ます。この会報は3月に発行されました。内容が卒業生に向けたものとなつてい

なつていのはそのためです。同窓会では入学された方全員を準会員として位置づけし、支援してまいります。

英知大学同窓会総務委員会

